2010 年 7 月 28 日放送

漢方医人列伝 「華岡青洲」

北里大学東洋医学総合研究所　漢方診療部　副部長　　早崎　知幸

本日は華岡青洲についてお話します。

青洲が世界初の全身麻酔下での乳癌手術に成功した時代は、徳川家による幕藩体制が確立し、鎖国体制が敷かれてからおよそ 1 世紀半が経ち、唯一貿易を許されたオランダから多くの書物が流入して、ヨーロッパの文化とともに、医学も徐々に浸透し始めていた頃でした。1754 年に、山脇東洋が日本人初の人体解剖を行い、1774 年には、杉田玄白らが『解体新書』を刊行するなど、観察と実験による実証主義医学が進み、近代日本医学が目覚めつつある時でした。

華岡青洲は 1760 年（宝暦 10 年）、開業医の父、直道の長男として紀伊国西野山に生まれました。子どもの頃は、自然豊かな山村で父の医術を学びながら育ち、1782 年（天明 2 年）23 歳になった青洲は京都に遊学しました。

まず、内科の師匠として吉益南涯の門をたたいて古医方を学び、その後、オランダ流外科医である大和見立に師事しました。その後は特定の師匠にはつかず、優れた医者があると聞くや飛んで駆けつけ、熱心に教えを受けたそうです。

この京都遊学時代、中国・三国時代の伝説的名医「華佗」を知ったといわれています。麻酔を使って手術を行ったといわれている華佗の存在は、青洲に大きな影響を与えること

になります。

1782 年（天明 2 年）、3 年間暮らした京都から帰郷。その年に父が死去し、家業を継いで、診療を行いながら動物実験を続けて、麻酔薬の研究も着々と進めていきました。

最後は母と妻の献身的な協力もあり、麻酔薬「通仙散」（別名「麻沸散」）を完成させたのです。

この青洲の麻酔実験をめぐって献身する嫁・姑の葛藤を描いた有吉佐和子の小説『華岡青洲の妻』によって、青洲の名前が一般の人々にも知られるようになったことは、皆さんもご存じのことかと思います。

そしてついに、1804 年（文化元年）、この通仙散を用いて全身麻酔下での乳癌摘出術に、世界で初めて成功しました。米国人医師ウイリアム・モートンのエーテルを使ったガス麻酔の成功に先立つこと 40 年あまりの快挙でした。それまでの外科手術は麻酔なしで行われており、患者は激痛に耐えなければならなかったため、通仙散の完成は、医学の歴史の新しい扉を開く一歩だったと思います。

その後は、整形外科や泌尿器科、産婦人科など、治療領域は多岐にわたり、現代にも通用する手術を行っていたようです。

このような成果により、その名声は日本中に知れわたることになり、難病患者だけでなく、医塾「春林軒」には、青洲の医術を学ぶために、医師や医学生が全国から集まりました。その門人は千人を超え、本間棗軒など数多くの名医を輩出することになったのです。

また、紀州藩主の徳川治宝から侍医の招きを再三受けましたが、公職に就くと一般患者の診療ができなくなることを理由に、辞退し続けました。しかし最後は断りきれず、一般患者の診療を継続することを条件に、紀州藩の侍医になったというエピソードがあります。

医術の研究と実践に生涯を捧げた青洲ですが、乳癌摘出手術の経過を記録した『乳癌治験録』の他は、自ら書き残した文章はほとんどありません。今日、青洲の著として伝わる書物はすべて、門人たちの書き残したものです。内容は、金瘡、瘍科、整骨、産科、傷寒、内科、痘科、眼科、治験録、図説、製薬、処方集など多岐にわたりました。

代表的なものとして『外科神書』、『瘍科瑣言』、『青洲先生治験録』、『春林軒丸散方』などがあります。

当代随一の医学の権威でありながら、自分の著書をまとめなかった理由としては、青洲が臨床医として経験を積むなかで、医術書で得た知識を実地に生かすことの難しさを痛感していたからで、その思いを次のように述べています。「私の医術は心で感ずれば自ずと手技となって現われるもので、口に出して言い表すことも、本に書き表すこともできない」と。

青洲が創った麻酔薬「通仙散」は、中国の華佗が麻酔薬として使用したとされる「麻沸散」を参考にしました。「麻沸散」は、曼陀羅華（まんだらげ・別名チョウセンアサガオ）を含む処方で、通仙散のこの曼陀羅華を主薬として、曼陀羅華 8 分、草烏頭 2 分、白芷 2 分、当帰 2 分、川芎 2 分、南星炒 1 分の 6 種の生薬を組み合わせたものでした。

曼陀羅華には、スコポラミンやアントロピンなどが含まれており、薬理学的には、これらの成分による麻酔効果であると考えられています。

現在よく使用される処方で、青洲が考案したものに十味敗毒湯があります。これは『万病回春』にある荊防敗毒散の薬味を取捨選択して創ったものです。また、膏薬をよく用いていたようで中黄膏（ちゅうおうこう）、紫雲膏（しうんこう）などは青洲が創作したものです。紫雲膏は『外科正宗』にある潤肌膏（じゅんきこう）をもとに創作したものです。

最後に、青洲のひととなりに、いくつかの視点から触れてみます。

青洲は医術一筋に生き、質素な生活を心掛けていましたが、趣味によって自らの心を磨くことも忘れていませんでした。漢詩を嗜み、書道の腕前も高い評価を得ていたようです。

独自な外科術を考案した青洲は、手術を効率よく行えるように、専用の道具を始め、様々なところに工夫を凝らしました。

門人たちに修業の証として与えた青洲の肖像画にも描かれていますが、手術着として用いた羽織と袴には、「外科的結紮（けっさつ）」と呼ばれる結び方で作られた“わっか”があり、これをたすきに通すことで、そでなどがたくし上げられ、着物が邪魔にならずに手術ができました。

青洲が考案したといわれるこの結紮法は、200 年後の今日でも用いられており、華岡流外科術がいかに優れていたかを示しています。

青洲の遺した有名な言葉に、「内外合一　活物究理（ないがいごういつ　かつぶつきゅうり）」があります。「内外合一」とは、「内科と外科を区別せずに学び、どちらかだけに固執することなく柔軟に用いるべきである」という意味で、「活物究理」とは、「生きたものの中に真理があるから、深く観察して患者自身や病の特質を見極めなければならない」という意味です。

当時の内科とは漢方医学であり、外科とはオランダ医学、すなわち西洋医学でした。苦しむ患者のためであれば、漢方医学と西洋医学を区別せずに用い、さらに民間医療も使えるところは取り入れて行う、和・漢・蘭・折衷の診療は、現代でいう広い意味での統合医療に当たります。つまり、200 年前に青洲が行っていた医学の精神は、明治という漢方医学が一度消えかけた時代を経て、再び復興してきた現代にも、そのまま当てはまることだといえるでしょう。

わずか 8 文字の語句ですが、この短い言葉は、青洲の学問の帰結であり、医療理念であり、人生哲学であったと思われます。

現在、日本麻酔学会のシンボルマークには、通仙散の主薬である曼陀羅華があしらわれています。また、米国のシカゴにある国際外科学会の栄誉会館の日本室には“青洲”が、そして中国室には“華佗”が、その栄誉を称えられて顕彰されています。「日本の華佗になる」ことを目標にして、自らの生涯を、病み苦しむ患者にささげた実績が世界で認められ、華佗の隣で褒め称えられることになるとは、1835 年（天保 6 年）、青洲が 75 年の生涯を閉じるまで、知る由もなかったでしょう。

しかし、この青洲の残した足跡、そして精神は、当時の医師だけでなく、時代を超えてこれまでも、そしてこれからも、われわれに医療人としてのあり方を問い続けていくことになると思います。